

# 障害者 コロナで医療・介護受けられず

## 「実態を知ってほしい」

大阪で新型コロナウイルスによる死亡者は、今年1月1日から3月8日までの発表で1102人。全国でも突出しています。検査したくてもできない、陽性が判明しても保健所からの連絡がない、症状が出て必要な医療を受けられないなどの状況が続いています。そんな中、介護を必要とする人が、発症しても医療も介護支援も得られない事態が生まれています。

### 脳性まひの高橋弘生さんが体験

「このままいけば死ぬか、もしれないと思いました。もう働けなくなるとも思いました。支援を必要とする障害者の実態を知ってほしい」

#### 何度電話をして もつながらない

その日から、週5日(月・金)の入浴や食事介助など、週1回のリハビリ、通院介助の3カ所の事業所が、支援をすべてストップ。真由美さんの週3回の家事援助、移動支援など3カ所の事業所からの支援もストップしました。A事業所からは、食料品や日用品の玄関口までの買い物代行をしてもらい、息子やきょうだい、姪甥、近所の人たちも、非常食や食料品などを送ってくれました。

#### 7日たちやっと 保健所から連絡

13日もせきとたん、ひどい腰痛に悩まされてベッドから起き上がれない状態に。トイレに向かう途中で失禁して下着やパジャマを汚してしまい、痛さと自分のふがいなさに、真由美さんにも強く当たってしまいました。

#### 寝たきりで筋力 が弱ってしまい

区役所保健センターから後で連絡する」と言って電話を切られました。弘生さんはこの日夕方、再び転倒、頭と腕、脇腹、膝を強打しました。17日、市から委託を受けている訪問看護リハビリ事業所の看護師が突然訪問し、防護服に着替え、血圧、酸素量、体温を測り、聴診器で胸の音などを聞きました。「困っていることではないですか」と尋ねるの「すべての支援がストップしている」と訴えましたが、「仕方がないです。もう少し頑張ってください」と言いました。ごみとなった防護服を置いて帰っていききました。

#### 自宅療養でなく まさに自宅放置

保健所が機能せず、発症後7日目によく連絡が入ったものの、言語障害もあって十分聞いてもらえず、区の保健センターに引き継がれ入院の検討を伝えられたのは、発症8日目。パルスオキシメーターや支援の食料が届いたのは発症9日目。自宅療養ではなくまさに自宅放置でした。

#### 非常時での支援 のあり方考えて

かつて大阪市には24区すべてに保健所がありました。2000年4月から全市1カ所の保健所と24区は保健センターになりました。維新府・大阪市政の下で公立病院の統合、保健所職員の削減などが行われ、現在の吉村府政は、コロナ患者治療の中心となる急性期病棟を、国の「地域医療構想」でいう過剰病床だと削減しています。

弘生さんは「コロナ禍は、障害者福祉制度の矛盾も浮き彫りにしています。現在の障害者福祉サービスは利用契約制度で、利用する障害者とサービス提供事業所との利用契約のため、行政は契約には関与しないことから、今回のような場合、ヘルパーなどの支援者の派遣は事業所の判断に任せられます。高橋さんの知人で脳性まひの方は、4日前に介助したヘルパーが発症し、事業所の判断で本人が濃厚接触者となり、突然支援時間が短くされました。本人は無症状で陽性が陰性かも不明。そんな場合は訪問診療も来てくれず、検査もできません。弘生さんは「今後、感染は続くもの想定して対策を早急に考えてほしい。感染時の日常的な支援をどう守り、障害者の命と健康をどう守るのかが真剣に考えていくことが、非常時の支援の在り方や体制づくりにつながると思います。」

# 「このままだと死ぬ…」

弘生さんは2月7日夜、A事業所のヘルパーから、食事、入浴、着替え、投薬介助などの身体介護を受けました。2日後の9日、弘生さんが職場の障害者相談

#### 介助ヘルパーが 感染したと知り

弘生さんは2月7日夜、A事業所のヘルパーから、食事、入浴、着替え、投薬介助などの身体介護を受けました。2日後の9日、弘生さんが職場の障害者相談

「この時点で自分は入院して、濃厚接触者だった妻も医療体制の整った療養施設に入れてほしかった」と弘生さんは言います。

#### 2人が受けていた週1回

入院できず介護支援もストップされた高橋弘生さんと妻の真由美さん。8日、大阪市鶴見区の自宅。

